

自己評価報告書(最終報告)

報告者

学校臨床実践コース
／佐藤 亨

■平成24年度の目標に対する自己点検・評価

I. 学長の定める重点目標

I-1. 科研費申請に向けた計画等

国立大学法人運営費交付金は年々削減され、教員の研究費配分も厳しくなっており、教員各自が研究のための外部資金を獲得しなければならない状況である。そこで、科研費申請に向けて、あなたが考えているテーマと計画等について示してほしい。

1. 目標・計画

正直、現在は教職大学院の運営及び院生指導に時間を取られており、科研費申請にまで手を伸ばす余裕がないのが実情である。ただ、まだ先方の了解等が得られていないため実現できるかどうかはわからないが、2004年度から関わっている児童自立支援施設が、施設としてのあり方の見直しを進める時期にきており、可能であれば、それに関連して、児童自立支援施設の指導教育のあり方について、施設と連携して研究を進めることができると考えている。

2. 点検・評価

児童自立支援施設と協議しながら指導教育のあり方についての検討を進めていたが、様々な事情により年度途中において一時動きが中断した。ただ、2012年末頃から協議を再開しており、12月には指導教育のあり方の見直しのために、児童自立支援施設職員と共に他県の児童自立支援施設の見学も行っている。その後は、児童自立支援施設の側では様々な見直しの動きが生じているが、科研費の申請等を行うまでには至っておらず、今後の課題である。

I-2. 大学院学生定員の充足に向けた取り組み

専攻・コースのこれまでの大学院学生定員の充足状況を踏まえた上で、あなたは定員充足のためにどのような取り組みを行うか、具体的に示してほしい。

1. 目標・計画

学校臨床実践コースは、平成24年度の入学者は大幅な定員割れを起こしており、これまでに本コースに入学した院生から話を聞いた結果から考えられるのは、教職大学院が目指すスクールリーダーの育成という目標と、臨床を志望する院生が目標とするカウンセリングや教育相談の力を付けたいというニーズとの間にずれがあることが考えられる。これを踏まえて、平成25年度以降は現職教員は一つのコースで院生を募集する方針で、教員組織やカリキュラムの見直しを進めており、上述したようなニーズと目標のずれは少なくなるのではないかと考えられる。同時に、教職大学院の実情やそこでどのような力を付けられるのかを具体的に現場の先生に知ってもらう必要があり、そのために平成24年度からは本学の教育支援アドバイザーに登録し、その講演等の依頼があった際や、以前から行っている徳島県教育委員会から委嘱されたスクールプロフェッサーや人権指導員、徳島県から委嘱された人権問題講師として講演を行う際などに、積極的に教職大学院についての広報を行い、教職大学院についての理解を深めていただくように努力する。

2. 点検・評価

中間報告で述べたように、教育支援アドバイザーやスクールプロフェッサーとして学校現場に出向いた際に、教職大学院について説明し、教職大学院についての理解を深めていただくように努力したが、実際の応募者の増加にまではつながらなかった。

II. 分野別

II-1. 教育・学生生活支援

1. 目標・計画

○これまで同様に、教職大学院の授業の中で積極的に事例を扱うことで、実際に即した子ども理解や指導のあり方についての理解を深めてもらい、指導力の育成に努める。また、実習指導に関しては、院生の授業場面や事例検討の場面に積極的に関わり、学校現場における実践力の育成に尽力する。

○臨床心理士養成コースの査定の授業に関わり、特にロールシャッハテストに関しては、希望者にフィードバックを行うことによって、自己理解を深めさせると同時に、査定の力量アップにつながるよう努力する。

○臨床心理士養成コースの院生に対して、心理職公務員の情報を伝えると同時に、積極的に施設見学の機会などを提供し、就職に向けた方向付けを行う。

2. 点検・評価

中間報告で述べたとおり、教職大学院の授業の中で積極的に事例を扱い、現実に即した子ども理解の力を育てることに腐心した。また、教育相談の力を育てるためにロールプレイや体験学習を導入し、実践力の向上を図った。一方、臨床心理士養成コース院生に対しても、ロールシャッハのフィードバックや公務員試験対策として模擬試験や模擬面接を行うなど、概ね目標は達成できた。

II-2. 研究

1. 目標・計画

平成23年度の目標にしていながら達成できなかった女子非行についてまとめる作業を最優先とする。同時に、重点目標Iで述べたように、児童自立支援施設の指導の在り方についての研究を、児童自立支援施設と協働で行うことが可能かどうかの検討を行う。また、児童自立支援施設で行ったロールシャッハテストや刑務所で行った心理テストが一定の数になってきたため、これを研究としてまとめられないか、施設側との協議を行う。

2. 点検・評価

結局、女子非行についてはまとめることはできなかった。児童自立支援施設の教育指導のあり方についての見直しは、一時中断していた作業が再開はしたが、科研費の申請や論文としてまとめるまでには至らなかった。ただ、施設側と協議した結果、刑務所における愛人関係講座受講生の心理特徴についてまとめたものを、犯罪心理学会で発表することはでき、研究の面で一定の成果を上げることはできた。

Ⅱ-3. 大学運営

1. 目標・計画

学校臨床実践コースのコース長として、他の教員と連携しながら円滑なコースの運営に努める。同時に、平成25年度の教職大学院のコース再編の動きに向けて、教員組織やカリキュラムの見直しの作業を進める必要があるため、専攻全体の教員と連携しながら、円滑な移行に努力する。

また、教職大学院の専攻共通経費の執行担当者として、円滑な予算執行ができるように努力する。

2. 点検・評価

学校臨床実践コースのコース長として、円滑なコース運営を行うことができた。教職大学院のコース再編に関しても、円滑な移行に寄与することができた。教職大学院の専攻共通予算の執行担当者としても、財務担当者と協力しながら、円滑な執行をすることができた。

Ⅱ-4. 附属学校・社会との連携、国際交流等

1. 目標・計画

○これまでと同様に、以下の活動に取り組むことで、非行少年や犯罪者の再犯防止に努力する。

①児童自立支援施設(徳島学院)で、ボランティアスタッフとして関わる。

②徳島刑務所において、篤志面接委員として、受刑者のグループワークを行う。

③神戸保護観察所での、性犯罪者処遇プログラムにアドバイザーとして参加する。

○徳島県人権教育指導員等として、「刑を終えて出所した人たち」や「非行少年の抱える問題」について講演活動を行い、一般の方や学校関係者などの理解を深めてもらうことで、非行少年などの再犯(再非行)の防止に努力する。

2. 点検・評価

児童自立支援施設、徳島刑務所、神戸保護観察所、徳島県教育委員会などと連携しながら、非行少年の再発防止や徳島県における人権研修に寄与している。また、教職大学院修了生や臨床心理士養成コース時代の修了生から、随時様々なケースについての相談があり、その相談に応じることで社会貢献に寄与している。

Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)

○ 教職大学院院生への教育に関しては、事例検討やロールプレイなどの手法を導入することにより、実践力の向上を図ることができた。臨床心理士養成コースの院生に対しても、ロールシャッハの授業や公務員試験対策を通じて、教育に寄与することができた。

○ 教職大学院の運営に関しても、コース長や予算執行担当者として寄与することができた。

○ これまで通り、非行犯罪に関する関係機関への協力によって、社会との連携に寄与することができた。

● 一方、様々な努力を行ったが、教職大学院の定員確保には至らなかった。

● 研究面では、学会発表はできたが、論文にまとめるまでには至らなかった。